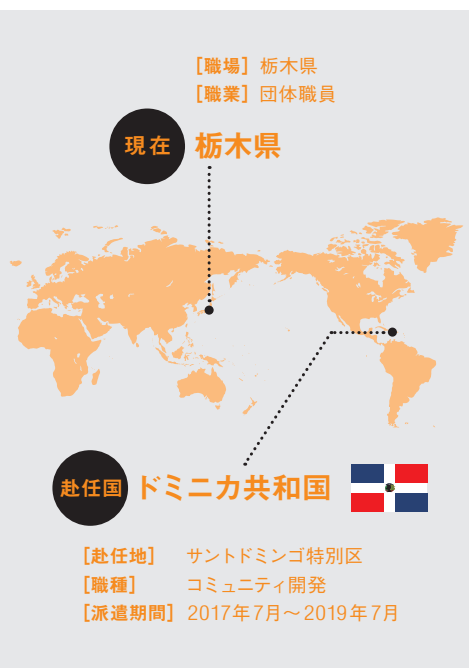




「アモール＝愛」で日本の農家を元気にする

穂積 翔太さん 栃木県宇都宮市 食農連携プロデューサー
Shouta Hozumi

JOCVとは？という大きな問いに対し、照れ隠しを含みながらも「愛」という情熱的な言葉で切り返す。
ストレートなその表現からは、JOCVによって180度人生観が変わったことが伝わってくる。

商社を退職後「海外で自分の力を試したい」とドミニカ共和国へ渡った穂積翔太さん。今、栃木で農家と実需者のあいだに立ち、農業が持続する仕組みを模索している。その歩みを支えるのは、派遣国で学んだ「愛＝アモール」だった。

穂積さんの現在地

農家と市場のあいだ

現在、穂積さんは食農連携プロデューサーとして栃木県内の農家と飲食店をつなぐなど、地域の農業を支える仕事を行っている。生産農家とホテル・飲食店などを結び、販路開拓や生産物への需要のすりあわせなどを引き受ける。農家の収入を多角化することで、農業に関わる人がより幸せになれる仕組みづくりを目指す。

穂積さん自身も福島で兼業農家で生

まれた。「農業はなくなることがない。とても大事なもの」大学進学時は農学部にと絞って出願し、農業経済学を専攻した。ゼミ研究の一環で中華人民共和国福建省を訪れ、日本に輸出される生姜が生産されている現場を見た。国境を越えて行われる農の生産・流通のダイナミズムに魅了された。

「農業の世界って収益性を出すのが難しい。ブラックボックスのような部分もあり、まだまだ改革する余地がたくさん



カカオを加工して販売する女性の生産者グループ

あると思うんです」日本の農業は持続可能性に課題を抱えている、と穂積さんは話す。現在関わっている栃木県内の農家も、20代から70代と幅広いが、収入の不安定さや後継者不足など、多くの問題を目の当たりにするという。「経営に苦しむ農家さんも、収入が増えれば、本当にその人がやりたかった投資に回せたり、家族に良い思いをさせたりできる。後継者がいない、というのもやはり収入の面が大きいと思います。収入が魅力的になれば、親父の仕事を継ぎたいという人はいる。そこを改革していきたい」

JOCV時代

ゼロから価値を生み出すやりがい

「20代のうちに海外で仕事をしたかった」と、穂積さんは大学卒業後、商社



カカオ加工品の試作検討会の様子



活動成果発表時の集合写真



県内のイベントでJOCV活動の報告を行う穂積さん

へ就職した。仕事のやりがいはあるが、将来に漠然と不安を抱くようになる。どうしても海外への夢を諦めきれず、ステップアップのためにと、JICA海外協力隊（JOCV）への応募を決意した。派遣先はドミニカ共和国。「日本と同じ島国で、農業の違いを見たいと思った」と、穂積さんは派遣が決まった時のことを振り返る。

要請内容は、森林保護のために植えられたカカオを活用して、住民の収入を向上させることだった。現地では、カカオの実を秤にかけ重量によって販売価格を決めていた。穂積さんは、その利益率の低さに着目。カカオを加工して販売する方法を提案した。

この方法は見事に的中。女性の生産者グループが組織され、高速道路の休憩所など販売ルートも拡大するようになった。やがて、グループも法人格を取得するまでに成長。穂積さん自身も、「ゼロ」からビジネスを生み出し、地域の様相に変化をもたらすプロセスに強いやりがいを感じたという。まさに「やりたい」と思っていたことだった。

現地では、仕事の成果だけではなく、人々の温かさに触れることもできた。活動の枠を超えて、他の隊員と日系移民の二世三世を巻き込み、バレーボールチームを立ち上げて交流を深めるなど、地域に深く溶け込んでいった。生産者グループのメンバーと食事を共にすることも多くなり、自宅に子どもたちが遊びに来ることもよくあった。「JOCVに参加するまでは、自分のことを『愛のない人間』だと思ってたんですよ。結婚したい

とか家族を持ちたいとかも全くなくて」しかし、人々から受けた無償の愛により、穂積さんの心にも少しずつ変化が生まれたという。「今、こうして情熱を持って農業に関わる仕事に打ち込めるのも、アモール（スペイン語で「愛」）のおかげ」と当時を懐かしむ。

未来へのビジョン

農業に関わる人をもっと幸せに

「海の向こうで受けた愛を、日本の農家さんがよりよくなるために還元することが人生の使命だと思ってます」

現在、穂積さんは、高級ホテルへの直接販路の開拓や、ニーズに合った農業加工品づくりのアドバイスなど、農家の経営安定に向けた活動に尽力してい

穂積 翔太さん プロフィール

福島県出身。農学部卒業後、商社で7年間営業を経験。30歳でJOCVに参加した。帰国後は、現地で学んだ「農家への寄り添い」を原点に食農連携プロデューサーとして栃木県内で活動。現在はホテルと農家を繋ぐ流通事業や農業M&A、地域商社への出向など多角的に地域農業の発展に貢献している。

る。今後は、農業の後継者不足の解決に取り組みたいと話す。こうしたモデルが全国に広がることで、日本の農業に一石を投じたいという穂積さん。「なんやかんやで好きなんですね、農業が。まずは地元で、僕に関わってくださったみなさんに幸せになってほしい」その活動には、ドミニカ共和国の人々の「愛」が変わらず流れている。



JICA留学生を対象に講義を行う穂積さん